

カウツキー 解説

都 留 大 治 郎

皮肉をいえば、カール・カウツキー (Karl Kautsky) の生涯は、少し長すぎたようである。一八五四年十月十六、ブラーグに生れ、一九三八年十月十七日、アムステルダムに淋しい亡命の生涯を閉じた。齢八十四である。ここに訳出した『権力への道』(一九〇九年)を最後にして、それ以後の半生は、まるであらゆるがなの蛇足のようである。しかも無邪気な蛇足ではない。レーニンが怒りをこめていったように、「一九〇九年には、革命の時代が近づいたこと、革命と戦争とむすびついていることについて一冊の書物を書いたカウツキー、一九一二年には、きたるべき戦争を革命的に利用せよ、というパーゼル宣言に署名したカウツキー、このカウツキーが、いまでは、手をかえ品をかえて、社会排外主義を弁護し、これを美化し、ブレハノーフとおなじように、ブルジョアジーといっしょになって、革命についてのあらゆる思想、直接の革命的闘争へむかっているあらゆる歩みをあざわらった」(レーニン『プロレタリア革命と背教者カウツキー』)のである。悪質な蛇足である。いや、ローザ・ルクセンブルグが書いたように、ドイツ社会民主党とともに、生きながらにして「悪臭をはなつ屍」となり果てていたわけである。

けれども、それだからといって、『エルフルト綱領解説』や、『権力への道』や、『農業問題』の古典的香気は、この「悪臭」によって、けっしてかき消されることはない。われわれの態度しとでも、これらを「プロレタリアートへの不朽の遺産」として取り扱い、このなかから、また沢山のものを素直にくみとらねばならない。だが同時にわれわれは忘れてないだろう。これらの優れた著作が、一九一〇年以降の汚れたカウツキーの名前と切りはなせないこと、それが優れておれば、優れておるだけ、それだけに、その後の裏切りが、マルクシズムと世界の労働階級に、いかに評しがたい罪悪であったかを。輝ける前半生と、「泥沼」におちた後半生が、カウツキーという人間のなかで、いかにあやしく結びつ

いているか、その結び目を甘く見すごすわけにはいかない。

つまり、カウツキーの曲折の多い長い生涯に、われわれは二重の義務を負っている。ひとつは、カウツキーという名の故に、ともすれば閉ざされがちなマルクシズムのこの豊かな宝庫の扉を大きくあけ拡げることであり、二つには「マルクス主義にたいする口さきでの忠誠と、日和見主義にたいする実際の屈服」(レーニン)とが、どういう形で結びつかを、その生涯に検証することである。この長い生涯には、二重の意味で、マルクシズムの理論と運動とがいかにかきびしいものであるかという教訓がある。こういう教訓をひきだすなら、その長い生涯も、われわれにとってはけつしてながすぎはしないかもしれない。では、その生涯の曲折をみよう。ここでは重点は、『エルフルト綱領解説』と、『権力への道の背景におけばよいだろう。

マルクシストになるまで

カウツキーがはじめて社会主義を知ったのは、十七歳、高等学校の生徒の時である。当時(一八七一年)起ったパリコムミュンの刺激からである。むろん、高等学校の学生の手などに、社会主義の啓蒙書など入るはずもなかったから、新聞などで得たいい加減な知識だった。一八七四年に、オーストリー社会民主(労働党の機関紙『平等』(Gleichheit))を読んだから、社会主義なるものが少し分り、はじめて、ラッサール等のドイツの社会主義文献に親しんでいる。同時にまた経済学の勉強もはじめた。病氣などのために少しおくれたが、その年の秋には、ウィーン大学に入り、哲学を専攻することにした。だがその翌年一月には、すでに社会民主党入党の手続きをとっているから、社会主義への熱意とそして勉強もかなり進んでいたであろう。

けれども当時のオーストリー社会民主党は沈滞し、カウツキーの理論を指導してくれるような人はいなかった。もちろん大学にもいなかった。だから高等学校当時からしていた歴史の研究を、独学でつづけ、とくにこの当時は、史観を摸索した。そして一八七〇年代、知識人の心を描えたダーウィンに心酔し、歴史にダーウィニズムを適用してみようとおもった。またマルクスにも多くの欠点は感じながら惹かれ、かえって社会主義者のマルクス批判には反対であった。ましてマルクスには冷淡であった。もちろん『資本論』は、読んでみたけれど、正直な所で歯がたななかつたらしい。経済学者としては、W・ロッシヤを手引として入りながら、これにはあきらまず、かえってイギリス古典派経済

学、A・スミス、D・リカード、J・S・ミル、また歴史学者H・T・バックルに親しんでいる。他面、それらの反対者、H・C・ケアリーや、E・デューニングにも興味をもった。A・シェッフレや、A・ランゲの社会観にも身近いものを感じている。結局、かれが当時、社会主義として身につけていたものは、ダーウィニズム、新マルクス主義を基調としたあれやこれやのゴタ混ぜであった。

だが勇敢にもこういう折衷主義を中味にした社会主義をふりかざしながら、ドイツやオーストリーの党機関誌、『ゾツイアリスト』(ウィーン)、『フォルクスシュタート』(ライプツヒヒ)や、社主義者鎮庄法下の非合法機関誌『ゾツイアル・デモクラート』(チューリッヒ)に、論文を寄せた。名前は、両親の手前伏せて、ジエンノス(Symnachs)という筆名を用いた。たとえは『ゾツイアリスト』に、連続寄稿した『農民と社会主義』(Die Bauern und der Sozialismus, 1879)等がそれである。こういう論文の内容はくだらなかつたにせよ、それがその後かれの発展に、まったく無意味であったともいえない。この寄稿によってW・リープクネヒトを知ったからである。そして文通をはじめ、一八七六年には、ライプツヒヒに旅して、直接、かれやA・ペーベルと相知った。

当時、かれはすでに、じぶんの一生を、党に結びつける覚悟はしていた。けれども、青年らしい迷いもないではなかった。社会主義者として、大学教授や高等学校の先生になることは、当時の事情から許されそうもなかった。だからといって、党の機関紙の編集や、その他の党の仕事だけをしたのでは、生活がたちゆかない。経済的に独立しつつ、勉強したり、党活動をする方法はないだろうか。先ず弁護士を考えた。そのために大学の籍を哲学から、法学部に変えてみた。しかし弁護士には不向きだということがすぐ分った。かれの思考の方法は、哲学的、歴史的であって、法的ではなかったからだ。次に、芸術方面を考えた。祖父も、父も、画家である。かれも幼少から、そういう才能は認められていた。だが高等学校時代に、眼をわずらったし、また先生からも、才能はあるけれど、学問や政治をやる片手間に絵を描いたのでは、立派な画家にはなれない、といわれて、これもあきらめた。次は、演劇関係の仕事。かれの父や祖父は画家というものの、舞台背景画家(ウィーン帝室劇場)だったし、母は女優であり、戯曲や小説も書いた。かれ自身にも、そういう血は流れている。すでに高等学校時代から、戯曲や小説を書いたこともある。小説を書いて党の機関誌に送ってみた。むろん、のせてはくれなかった。戯曲をかい、ウィーンで舞台にのせてもみた。見事な失敗だった。

いろんなことをやってみたが、結局、皆駄目だった。そのため一八七九年頃は、全く自信をなくしてしまっていたらしい。そのうえ、一八七八年には、社会主義者鎮圧法がだされてきた。だから、あとでふれる『社会の進歩にたいする人口増加の影響』の原稿はすでにできあがっていたのだが、とても陽の目をみることはおぼつかなかった。また、それが希望をかけている党自身も、弾圧の下に、ほとんど壊滅状態だった。勢い、いままで怠けていた大学の課程をとまかく終えることに、全力を注ぐより他に、いい考えも浮ばなかった。発心して、大学の研究に精をだし、学位論文の準備などをした。そこへ転機が訪れた。

フランクフルトに、若くて金持の民間学者、K・ヘibelグという男がいた。社会主義者鎮圧法発布直前に、社会民主党に入党し、弾圧法下の党の窮状を、財政的によく支えた男だった。むろん社会主義者というものの、ランゲ流の倫理的、感情的社会主義者で、マルクシズムには縁もゆかりもなかった。縁がない所か、マルクスの考えかたには露骨に反対したし、マルクスもまた「党籍をへ買い取った男」(マルクスのゾルゲ宛書簡)だとのしつた。このK・ヘibelグは、鎮圧法の発布前から、じぶんの資金で、党の学術雑誌『ツークンフト』をだしていたが、鎮圧法がでてから、公然と社会主義の宣伝をするわけにはいかないので、種々の経済問題ととりあつかうという名目で『国家経済学論集』を、ライプツヒでだしていた。またチューリッヒから、週刊誌『ゾツィアル・デモクラート』や、『社会科学、社会政策年報』を公刊した。この男に、先にふれたような事情で知りあったリープクネヒトが、カウツキーを紹介した。これは、一八七九年、幾つかの論文を、ヘibelグに送った。ヘibelグもまたカウツキーに興味をもった。そしてかれが机底に眠らせていた先の処女作を出版する援助と、それが出版されてからは、チューリッヒに来て、じぶんの出版事業の協力者になるようにとの、申出をした。

こうして『社会の進歩にたいする人口増加の影響』(Der Einfluss der Volksmehrung auf den Fortschritt der Gesellschaft, Wien, 1880.)は陽の目を見た。また、いままで色々な方向を摸索して結局ものにならなかったが、この時以来、漸く方向がさだまった。歴史と経済学の研究と、その成果を政策に応用することである。ヘibelグの申出は、かれの決心を固めさせ、またその可能性をあたえてくれた。カウツキーは明るい希望をもってチューリッヒに旅立った。

マルクシストへの成熟

一八八〇年、チューリッヒに移って、カウツキーの視野は急速に広がった。経済学の知識が豊かになると同時に、漸くマルクシズムへの「感染」がはじまった。それと同時にまた、非マルクス主義的なヘibelグの社会主義にはあきたらなくなった。皮肉にもヘibelグの下で、かれは、それとは反対のマルクスに傾むいていった。前に一度読んで放りだした『資本論』が漸く理解できるようになった。そしてこの機縁は、エンゲルスの『アンティ・デュリング論』と、五歳年長のベルンシュタインとの親交だった。

チューリッヒに来る前から、『アンティ・デュリング論』は、読んではいた。けれども感銘は非常にうすかった。というのは、これははじめ、ライプツヒの『フォアベルツ』に連載論文として現われ、しかも一八七七年の一月から、一八七八年の七月まで続いたものである。あまり長期にわたったので、理解できにくかったわけだ。しかも一本にまとまったのは、社会主義者鎮圧法のである直前だった。チューリッヒに来て読んだ『デュリング論』は、カウツキーをひきつけた。それには、デュリング的な傾向を漸く克服して、マルクス主義に立脚しはじめたベルンシュタインの指導もあざかって力があった。二人で、マルクス主義の文献を熱心に勉強した。事実、この時以来、カウツキーは、「私の経済学的、歴史的思考について、いままでの折衷主義を克服して、統一的思想をえようと努めた。」(自伝)そしてこれには、「私にあえた影響から判断すれば、マルクス主義の理解のためにこれほど多くを果した書物はない。マルクスの『資本論』の方が偉大ではある。しかし『アンティ・デュリング論』によつてはじめて、われわれは資本論を正しく読み且つ理解することを学んだ」(エンゲルスとの往復書簡集)というように、『アンティ・デュリング論』は、大きい役割を果たしたのである。

マルクスとエンゲルスとは、ヘibelグを、したがってかれのやっている機関誌や年報を信頼していなかった。党本部は、マルクス、エンゲルスの信頼をうるため、『ゾツィアル・デモクラート』の編集をいままでのフォルマルから、信用のあるK・ヒルシュに代え、また和解のために、一八八〇年秋に、ペーベルとベルンシュタインを、ロンドンに送った。更に、友交関係を持続するため、カウツキーを、一八八一年三月に、送った。むろん、それより以前に、カウツキーは、エンゲルスに、その処女作を送って批評をもとめていた。そしてエンゲルスから、「あなたはまもなく当地に來

は『フランス革命時代における階級対立』とす。) (*Die Klassengegensätze von 1789*, Stuttgart, 1887) また同年の『ノイエ・ツァイト』に連載してエンゲルスからも激賞された『鉱山労働者と農民戦争』(*Die Bergarbeiter und der Bauernkrieg, vornehmlich in Thüringen*, N. Z. III) 『近世社会主義の先駆者たち』(*Vorläufer des neuen Sozialismus*, Stuttgart, 1894) 等々である。

だがこういう歴史的研究ばかりをしていたわけではない。カウツキーの身辺も漸く多事を加える。一八八九年七月には、パリで、国際労働者会議が開かれ、第二インターナショナルの創立、メーデーのデモが決議される。この宣伝のために小冊子『労働者保護』とくに国際的労働者保護立法と八時間労働』(*Der Arbeiterschutz, besonders die internationale Arbeiterschutzgesetzgebung und der Achtstundentag*, Nürnberg, 1890) を書く。しかも、これは社会主義者鎮圧法下における最後の出版となった。末期的症状を呈しはじめたビスマルク政権の暴圧はますます激しくなったが、それに抵抗する労働者の力も強くなった。一八八九年には、ベルリンは未曾有のストライキを経験したが、翌九〇年二月の総選挙には、社会主義労働党は三五議席をとって第一党に進出した。ビスマルクも三月には退陣し、十月には社会主義者鎮圧法は廃止されたからである。宣伝活動も自由になったので、ドイツの強力な要請もあって、『ノイエ・ツァイト』は週刊になった。勢いカウツキーも、もう他の土地から編集もできないので、発行地ストウツガルトに移り住んだ。

久しぶりに公然たる活動の自由をえた党としても、急速に組織を確立し、新しい綱領をかかげねばならなかった。一八九〇年、十月ハレに党大会をひらいて、『ドイツ社会民主党』と改称し、新綱領草案を作成して、次期大会で採決することを決議した。草案には、党指導部草案、『ノイエ・ツァイト』編集部草案、A・アウエルバッハ、P・カムプマイエル、H・ルクスの草案、J・シュルテンの草案、等種々であった。翌年の十月十四日―二十日のエルフルト大会では、『ノイエ・ツァイト』編集部草案が、一、三の字句を挿入して、新綱領として採択された。そしてこの『ノイエ・ツァイト』編集部草案とは、実は、カウツキーの草案である。(綱領の実践的部分はベルンシュタインの手になったものが)カウツキー案には、ベーベルも賛成し、エンゲルスもかつてのゴータ綱領にたいするマルクスの批判が生かされているとあって大体賛意を示し、広く党内一般からも歓迎された。こうして『一八九一年エルフルト党大会で決議せる『ドイツ社会民主党の綱領』はできあがった。ドイツ社会民主党が、マルクシズムに貫かれた綱領を、はじめて掲げることができたわけだ。更に、カウツキーには、綱領草案作成者という関係から、その解説を書くようにとの党からの要

請がされた。この解説をかいたものが、本書に訳出した『エルフルト綱領解説』(*Das Erfurter Programm*, Stuttgart, 1892, 325S.)である。(本訳書の底本にしたのは一九二二年の第七版である。だから第七版への序文もついているが、これは必要でないと思つて収録しなかつた。)

マルクシズムの擁護

九〇年に入るにおよんで、資本主義は産業資本の段階から独占段階に移行し、帝国主義諸国家間には植民地獲得競争が激化した。労働者階級の陣営でも、国民的社会主義政党が成立し、たとえばドイツ社会民主党のごときは各国の労働者党の先頭をきって、急速に発展していった。だが他面これは、労働者階級の内部に、社会主義社会の実現は、漸進的な社会改良によって得られ、必ずしも政治革命を要しないというような幻想が生じ、マルクシズムの修正、ひよみ主義があらわれはじめた。その先駆を、たとえば、ドイツ社会民主党幹部フォルマールの一八九一年の、党基本政策の修正要求にみる事ができる。これは、ベルンシュタインによってヨリ体示化された。ベルンシュタインは、すでに一八九六年秋から、『社会主義の諸問題』という題で、従来の考えかたに批判をだしはじめた。カウツキーも、はじめの間、相手がベルンシュタインであるだけに、その批判は結局はマルクシズムの発展線に行われるものだろうとおもっていた。ところが、九七年、九八年とその論文がすすんでくるにつれ、これがただならぬ修正であることに気づいた。けれども、カウツキーは、ベルンシュタインがこれを一本に編む際には、それが杞憂であることが分るだろうと、未だ期待していた。それは一本となつて、『社会主義の前提と社会民主党の任務』(一八九九年)として、現われたが、期待はみごとに外れて、マルクシズムの完全な修正、完全な背信だった。カウツキーはただちに筆をとつて、これを批判し、『ベルンシュタインと社会民主党の綱領』(*Bernstein und das sozialdemokratische Programm*, Stuttgart, 1899)を書いて、敢然と、マルクシズムの正統を擁護した。しかもこういふ修正が、ベルンシュタインからただだけに、「私の折衷的な考えかたを、統一的な科学的な考えかたによって駆逐することに、エンゲルスとともに、もっともあずかつて力があつた、そしてエンゲルスの死後は、この考えかたの擁護と発展に、前よりもより一層その人の援助を期待していたエドワード・ベルンシュタイン」(自伝)からでただけに、カウツキーは、ますます熱情をもつて、この対修正主義闘争にのりだしていった。――これより十七年後には、この解説の冒頭にかかげたような、おなじ怒りの言葉を、カウツキーみずから、

レーニンから受けようとは、――

これより前、この修正主義運動のひとつの機縁にもなった農業問題に関する論争が、社会民主党内に湧きかえった。社会主義者鎮圧法の廃止以来、社会民主党は、都市労働者を急速に捉えていったが、農村ではその発展はいぜんとして遅々としていた。一八九四年、フランクフルト大会で、労働者保護ばかりでなく、農民保護も必要だという修正がだされたが、社会民主党内でも、まだ農業問題にたいする理解のほどは、きわめて素朴だった。大多数のものは、工業でも農業でも、大経営の勝利がたえまなく続くこと、機械的に割りきっていたし、そうでないものは、ダーヴィッドのように、農民家族経営に、農業の最高の形態をみて、大経営は分解し、細分化すると考えた。そういう混乱を整理して論争に終止符をうち、農業問題にたいするマルクス主義的な見解の典型を打ちだし、同時に社会民主党の農業綱領をつくらうと、カウツキーは考えた。事実、かれの解釈は、基本的には、一八九五年ブレスロウ大会でも一般の承認をうけていたが、その総決算として名著『農業問題』(Die Agrarfrage, Stuttgart, 1899.)を、あらわした。十九世紀の幕切れに、レーニンの『ロシアにおける資本主義の発展』と並んでたてられた農業問題におけるマルクス主義の勝利を示す二つの大きな記念銘である。

世紀は変わった。資本主義は帝国主義段階への移行を完成し、矛盾は一層激化し、階級対立は尖鋭化した。ロシアではすでに革命は戸口の前までできており、それにつづいて、ドイツ、オーストリアにも、革命的情勢は切迫していた。カウツキーは、そういう革命の必然性を適確に予想し、革命におけるプロレタリアートの任務を指し示すため、『社会革命』(Die soziale Revolution, Berlin, 1902.)を書いた。これはまた修正主義にたいする真向からの対決であり、正統派マルクス主義の擁護でもあった。一九〇三年六月選挙に、三百万票、八十一議席を獲得したドイツ社会民主党は、九月ドレスデン大会で、修正主義者に圧倒的勝利を示した。また翌四年のインタナショナル六回大会は、ブルジョア政府への参加を主張する修正主義者を、二七対三で斥けた。

一九〇五年、ロシア革命は予想どおり起った。けれども、革命的情勢の持続と強度、欧西諸国への影響は、カウツキーのおもったほど大きいものではなかった。けれども革命的影響がなかったわけではない。オーストリアでは、一九〇七年、普選要求の大衆運動が激化し、ドイツでも、翌八年、社会民主党の呼びかけで、ベルリンに、普選要求の大デモが敢行された。パリの労働者は戒厳令下に、ストライキ、デモを組織し、ブタベストでも、普選要求のストが起った。

革命的情勢は、カウツキーの予想したほどではなかったにせよ、全西欧諸国に波うった。それに加えて、インタナショナル第七回大会が、『世界戦争反対宣言』を、採択したように、イギリス、ドイツを中心とする軍拡競争は、いよいよ露骨になった。この二つの要素の相互作用は、ヨーロッパ資本主義諸国への危機の一層の激化を、カウツキーに予想させた。破局化は避けられず、戦争と革命とが結びついており、そこにプロレタリアートの政権奪取の道があると、そう考えて書いたのが、『権力の道』(Der Weg zur Macht, Berlin, 1909.)である。レーニンも推奨するように、カウツキーの、最後の良心に輝く作品である。

マルクシストとしての道を踏みあやまっ

一九一〇年以降も論争はつづいた。けれども主客全く所を異にして。かつてカウツキーは、マルクシズムへの道を示してくれた年長の友ベルンシュタインの誤りに、激しい情熱をもって食いついていったが、今度は逆に、自らが育てた若い友ローザに手痛い批判をうけねばならなかった。一九一〇年『ノイエ・ツァイト』二八巻(一)誌上に展開されたゼネスト問題をめぐる論争がそれである。ゼネストを主唱するローザにたいして、労働者がこの武器を使うには、その条件と限界があるとして、カウツキーは反対する。そしてこれを更に一書にして『政治的ゼネスト論』(Der politische Massenstreik, Berlin, 1914.)を展開した。

こういう問題にたいする見解の相違、本質的には革命の方式にたいする見解の相違が、社会民主党を備えて、右派、中央派、左派の対立を次第に激化していった。そして右派はもろんのこと、中央派に代表されるカウツキー主義も、レーニンのいうように「偶然なものではなく、第二インタナショナルの諸矛盾の社会的産物」であった。戦争の危機が切迫するに従い、党内におけるこの対立、腐蝕はますます濃化する。一九一二年、インタナショナルは、まだ戦争反対のバーゼル宣言を可決し、ドイツ社会民主党もケムニッツ大会で、帝国主義反対の決議をしている。ここまでどうやら保ってきた良心の灯は、翌一三年には、ほとんど消え細り、翌一四年には完全に消え消される。すなわち、一三年六月議会ではドイツ社会民主党はじめて軍事予算に協賛をあたえ、(しかも前年の総選挙に記録的大勝を博しているのに、)九月イエーナ大会もこの協賛に承認をあたえた。それでも翌一四年七月には、ドイツ社会民主党として戦争反対の旗をたばしておりながら、また舌の根もかわかない八月四日には、社会民主党議員団は、戦時公債の提案に賛成し、同日、「戦

時公債提案協賛」の歴史的宣言を発する。第二インタナショナルは文字通り音をたてて崩れた。

もともと社会民主党内には、いかなる場合にも軍事予算に賛成投票することをきめていた右派と、反対投票することなきめていた左派があった。カウツキーと、中央派は、どっちつかずの態度をとっていた。というのは、かれは、戦争は本質的には、無条件に正しいとも、無条件に反対すべきものとも考えていなかった。かつて一八七〇年普仏戦争の開始時に、ペーベルとW・リープクネヒトは、北ドイツ議会で、戦時国債案に賛成したが、その故事をまねて、今度も中立的態度をとることが正しいと信じこんだ。歴史にあれほど明らかなカウツキーが、すでに歴史のなんたるかが分らなくなっていた。だがそれは独りカウツキーの不幸ではなく、ドイツ社会民主党の不幸であった。というのは、カウツキーや中央派のこういう態度のため、社会民主党議会議決が、左派は右派に惨敗し、先にみたような戦時予算協賛の声明をだすことになったからだ。

もっとも、その年の十二月、第二回戦争予算案には、K・リープクネヒトは党議を破って、独り敢然と反対投票したが、カウツキーは他の十名と乗権した。リープクネヒトの一票は、清涼剤であっても、社会民主党全体の腐敗をどうとめるとも、もうできなかった。翌一五年、第五回戦時予算案には、カウツキー自身、反対投票をして、党議院団より除名された。一九一七年四月には社会民主党内の反対派諸組織がゴータに全国協業会をひらき、独立社会民主党をつくった。カウツキーもこれに属した。当時のかれは、戦争勃発までの党活動四十年間というものは、常に多数派に属して活動してきたのに、いまでは左翼と対立し、更に右翼とも離れ、わずかな支持者しかなくなり、せまりくる身辺の寂寥をしみじみと感じていた。もっとも独立社会民主党には、あとで、スパルタクス団、ラデック派も加わった。

その上、新しくできた独立社会民主党内部でも、かれは、全般的な支持をうけてはいなかった。その多数派は左翼で、かれと対立していたからである。だがカウツキーにとってもっと悲しかったことは、社会民主党と分れたために、永年手塩にかけた『ノイエ・ツァイト』の編集を迫られたことであろう。一八八三年以来個人的機関雑誌として、一九〇一年からは公然たる党の理論雑誌として編集してきた『ノイエ・ツァイト』、かれの理論活動の母胎であった『ノイエ・ツァイト』。それはもう彼の半身であった筈である。事実、その事件を回顧してこう語っている。「私がつくりあげた活動の場、一代を通じて私の生命活動はそこに集中し、またそのなかで、それを通じて、同時代の社会主義の偉大な指導者たちと協力し、更に私とその性格を刻みこんだ活動の場、その場から強制的にひき離されたのが、ちょうど孤立状態が

ますます進むのと重なりあっただけに、それだけに私には耐えられなかった。」(自伝)

十一月ロシア革命起る。その情報が分ってくるにつれ、かねがねメンシェヴィキを支持していたカウツキーは、ソヴェット革命誹謗の書『プロレタリアートの独裁』(Die Diktatur des proletariats, Wien, 1918.) を書いた。レーニンはすぐさま「背教者カウツキー」を書いて、その誤りと、その背教、無節操、ひよりに主義への追従を、痛烈に批判した。だが、カウツキーは、なおも、『テロリズムとコムニスム』(Terrorismus und Kommunismus, Berlin, 1919.) 『デモクラシーから国家奴隷制へ』(Von der Demokratie zur Staatsknechtschaft, Berlin, 1921.) と、誤りを深くしていった。だが、これはレーニンの怒りを買っただけではない。カウツキーのこういう態度には、当然、スパルタクスブンドも反対するし、独立社会民主党の人々さえ、こういう局面でボルシェヴィキを批判することはロシア革命を成功させる道でないといつて、激しく反対した。カウツキーはこれによってまた優れた友を失い、その孤立化を深めていった。

大戦が終り、一八年十一月ドイツ革命が起り、シャイデマンが共和国の成立を布告し、独立社会民主党と社会民主党の連立政権になると、カウツキーも漸く多事となる。ベルリン大学や、ミュンヘン大学に教授としてよばれたが、これはゆかなかつた。しかし社会化委員会の議長になったり、外務省の仕事は、喜んでひきうけて働いている。けれども革命の情勢は刻々と変化し、その年の暮には、スパルタクス団はベルリンに武装デモをしかけるし、政府は反革命の側に移行しはじめる。独立社会民主党は政府から脱退するし、スパルタクス団は独立社会民主党から分れて、ドイツ共産労働党を結成する。カウツキーも独立社会民主党とともに政府の職を辞す。翌一九一九年一月には、政府の弾圧に抗して、二十万の武装労働者が、革命の擁護と推進のために市街戦に進出。ノスケの軍隊により弾圧され、ローザとリープクネヒトは虐殺されるが、三月再び、スパルタクス団を中心に武装労働者が市街戦に進出。今度もまた反革命の勝利におわり、ドイツのプロレタリア革命は遂に、開花しないまましぼむ。こうして、七月三十一日、国民議会はワイマル憲法を採択した。だがこの間、独立社会民主党の左翼多数派は、スパルタクスブンドに近づき、同党ライプツヒヒ大会では、ソヴェット制を含む実行綱領を採択し、カウツキーの孤立化はいよいよすすんでゆく。

遂に、翌二〇年ハレの大会で、独立社会民主党は分裂の憂目に会う。すでにライプツヒヒ大会で、第二インタナショナルからの脱退を決議していたが、ハレの大会で第三インタナショナルへの加盟問題で紛糾し、加盟派が優勢を示し、第二インターを固守するカウツキー派と正面衝突したからである。ただちに左翼は党を離れて共産労働党(スパルタク

ス団)と合同して、ドイツ統一共産党となる。残った右派は、また、急速に社会民主党に近づいていった。

左派を追いだした独立社会民主党と、社会民主党の間には、もう本質的相違はない。カウツキーもこの両党の合同を策し、新しい綱領をつくって、この合同の基盤にしようとおもった。そうしてできたのが、『プロレタリア革命とその綱領』(Die Proletarische Revolution und ihr Programm, Berlin, 1922.)である。これは両派の全機関紙から支持をえた。だが皮肉なことには、かれの生んだ中央理論機関紙『ノイエ・ツァイト』だけが、これに反対した。歴史のアイロニーだった。しかし、ともかく二二年のニュルンベルグ大会で、両党は合同し、カウツキーは久しぶりに社会民主党に帰った。同時に、社会民主党の尊敬と友情と信頼も、八年ぶりに、カウツキーに帰った。いままでの孤立がつかっただけに、この復帰は、かなり老いたるカウツキー(六十九歳)を喜ばせた。だから満足をもってこう書きつけている。

「こうして、一九一四年の秋以来のあらゆる齟齬、葛藤のうちに、私の晩年は、明るい澄んだ夕陽のなかで、和解的な終末をみる事が約束された。」(自伝)

けれども、そんな約束は少しも果されなかった。というのは、これから先、カウツキーはまだ十五年を生きるわけだが、社会民主党の腐敗と無気力はますますひどくなり、一九三三年ナチス制覇とともに、完全につぶされてしまい、かれ自身をも亡命地に飛ばしてしまつたからである。むしろ、この間にも、かれの頭脳は回転を止めたわけではなく、旺盛な活力で、『資本論』民衆版の編集を完成(一九二九)したり、大著『唯物史観』を刊行したりしている。

一九三八年、十月十七日、亡命地アムステルダムに、この老いたるゾツリアルデモクラートは世を終る。その死に、一層のいたましさと、救いがたさを感じるのは、かれがただ「背教者」として死んだからではない。むしろ「修正されるマルクシスト」として、私は生きてきたし、また死んでいくであろう」と、おもいこんでいたからである。

*

*

*

著 者

Karl Kautsky (1854-1938)

原 書

1. Das Erfurter Programm, 1892.

2. Der Weg zur Macht, 1909.

3. Karl Kautsky, 1924.

使用テキスト

1. Das Erfurter Programm, Stuttgart, 7te Aufl. 1922.

2. Der Weg zur Macht, Berlin, 1909.

3. Die Volkswirtschaftslehre der Gegenwart in Selbstdarstellungen, herausgegeben v. Dr. Felix Meiner, Leipzig, 1924. S. 117-153 'Karl Kautsky'